

ロシアはいかにして生まれたか

岐阜聖徳学園大学教育学部教授

宮野 裕

はじめに

ユーラシアにまたがる大国ロシアは、日本とは主に18世紀以来、良くも悪くも隣国として関係を結んできた。文学や音楽の作品は特に19世紀以降、日本に大きな影響を及ぼし、感動を与え、他にも社会主義・共産主義をはじめとする社会思想も多くの日本人、そして日本政治の動きを左右してきた。その一方で、ソ連時代のロシアは、第二次大戦後に生じた冷戦においては「敵国」、北方領土問題では融通の利かない頑固な相手、或いは日ソ中立条約を破った「裏切り者」という捉え方（日本のシベリア出兵などはさておき）も散見される。

そしてこうした毀誉褒貶の烈しいロシアという国の特徴としてイメージされるもう一つのものが、ロシアの政治権力の強大さや権力の集中、そしてその行動様式であろう。国内においては特に独裁とも見なされる形で民を押さえつけるがごときイメージがある（現実にはそうとも言いがたい事例も多いのだが）。他には、いわゆる「西側諸国」（一般的には「カトリック圏」および「元カトリック圏」との衝突を厭わない政治方針が目につくと言えようか。こうしたロシアの特徴もまた、「我々とは異なる」、時に理解しがたいロシアというイメージを作りあげている。

しかしながら、今後もロシアは隣国であり続けるのであるから、異質に見えるこの国を端から敵視するのではなく、ロシアが生まれた過程・背景を知ることによってロシアやロシア人を洞察し、彼らの理解を深め、それに基づいて個々の対応を考えることが重要になってくる。以下ではこの過程・背景を、およそ時系列順に、幾つかの要素ごとに述べることにしたい。

1. スカンディナヴィア人とフィン系諸族、スラヴ人との邂逅

高等学校の世界史教科書には、ロシアの起源について、およそ次のような叙述がある。8世紀頃

に北方のノルマン人の活動が活発になり、彼らの一部が現在のロシア北方に到来してノヴゴロド国を建国した。その後彼らは拠点を南方のキエフに移してキエフ公国（キエフ・ルーシ）を建て、土着の東スラヴ人を支配下に置いたと。こうした叙述は、ロシア最古の年代記である『過ぎし年月の物語』のそれをなぞっており、『物語』が日本の教科書記述にも大きく影響を及ぼしていることがわかる。他の記述史料が少ないことが原因で、この話は幅をきかせているのである。しかし現在では、主に考古学の成果に基づいて、起源についてのイメージは変わりつつある。

まず、スカンディナヴィア人（あえてノルマン人ではなくスカンディナヴィア人と書く）の活動が主に8世紀以降に活性化し、その一部がフィンランド湾やラドガ湖経由で現在のロシア北西部に到来した最初の段階においては、この地域にまだスラヴ人は到来しておらず、フィン系部族が住み着いていた。スカンディナヴィア人が最初の拠点としたラドガ（スターラヤ・ラドガ）やラドガ湖も恐らくはフィン語にその語源を持つ。気候や森林の被覆率、肥沃な土壌の僅少性という自然条件は農業や牧畜を普及させなかった。このような地にスカンディナヴィア人が到来したのは、主に獣皮の獲得のためであり、彼らはこれを主にヴォルガ川を經由して南（アラブ地域やコンスタンティノーブル）に持ち込んで財貨を得たようだ。9世紀にはイリメニ湖岸に居留地が築かれた。この地にはスラヴ人が存在していたが、スカンディナヴィア人の主目的はやはり彼らの支配というよりも、河川を通じた国際商業路の掌握、そしてそれを通じた利益の獲得であった。10世紀になるとヴォルガ下流に位置するハザール国が不安定になり、南行きのルートとしてドニエプル川経由のそれが開発され、その結果、ドニエプル中流域に位置したキエフの重要性が高まることになる。年代記によるところ、「リューリク一族」の指導者オレーグ

によるキエフ占拠は882年のことである。ここに至ってようやくスカンディナヴィア人による本格的な領域支配が始まった。オレーグらは近隣のスラヴ人を従わせた上で貢納関係を結び、河川ルートでの支配と地域支配の両面を持つキエフ公国が形成された。こうした支配には土着部族のエリートとの協力が必要になる。その結果、相対的に少数のスカンディナヴィア人は、このエリートや地域から影響を受けてスラヴ化していくことになる。但し、「リューリクの血筋」(リューリク朝)は他のそれとは区別され、この血筋だけがその後のルーシにおいて支配者たる「公」となることを認められることになる。この点は同じ征服王朝であるイングランドと共通点を持つ。またスカンディナヴィア人と土着民の間では当初、「契約」のようなものが結ばれていた痕跡があり、このこともまた、ルーシ以外の地に至ったスカンディナヴィア人の幾つかの事例と共通点を有する。この契約関係は、その後のロシアから消え失せてしまったように見えるが12世紀頃までのルーシでは諸都市における公と共同体との関係(よく知られるのはノヴゴロド公国の例)に見いだすことができる。リューリクの血筋という客観的要素とそれに基づく臣民との区別の明確化は既にこの時期に定着していたのである。ロシアでは16世紀末にリューリクの血筋が途絶えるまで、「公の資格はリューリクの血筋に限られる」という通念が疑われたことはほぼなかった(イヴァン雷帝期の「皇子」シメオンの事例は「反例」に見えるが、通念が変わったとまで言えまい)。

2. ビザンツとの関係の形成と正教国家の形成

ロシアの形成に、次に大きな影響を及ぼしたのは、キリスト教の導入であった。加えてそれがビザンツからの導入であった点も劣らず重要であった。10世紀中頃以降、ルーシには西のカトリックからキリスト教を受け入れる可能性もあったが、最終的にはウラジーミル聖公が988年にビザンツのキリスト教を、すなわち正教を受け入れた。

正教の導入は、ビザンツからルーシへの聖職者の到来を招いた。とりわけ高位聖職者はビザンツ人で占められており、彼らは正教の教義・教理と共に、様々なビザンツの文化を持ち込んだ。皇帝

権力と教会との関係が極めて近接したビザンツ型の社会イメージがルーシにおいても理想型として持ち込まれると、ルーシ各地を治めるリューリク家の諸公(主にウラジーミルの子ら)とその地を管轄する主教との関係は近いものとなる。但し、当初の段階では、主教たちはあくまで帝都コンスタンティノープルの総主教を頂点とする教会ヒエラルキーの中に位置付けられており、基本的には、キエフの府主教を介して、総主教の命令権下にあったと言える。時に、帝都の意向と異なる形で、ルーシ側で世俗権力と結ぶ形で府主教・主教らが独自の動きを見せることもあったが、そうした動きは、最終的に15世紀半ばにロシア正教会が「独立」するまでは非合法的なものであった。

ビザンツからのキリスト教の受容がロシアに及ぼした第二の影響は、ローマ・カトリック教会に対する嫌悪、敵視の「播種」である。但し、ルーシに正教が導入された時期、東西教会の間に教理等の差が一定程度生じていた(三位一体の教理における「子からも」の追加問題など)ことは確かだが、そのことは両教会の不和、ましてや断交を招くほどのものではなかった。一般に言われる1054年における東西教会の分裂という出来事も、ルーシにおいてはそれほどインパクトを持たなかった。ところが1204年に第4回十字軍が帝都を落としたことは、ルーシにおいても大きな衝撃を持って受け止められた。これ以降、ルーシでは反カトリック文献が増え始める。

またこの13世紀においてルーシは、カトリックから直接の侵略を受けていた。いわゆる「北の十字軍」(ドイツ騎士団など)がヨーロッパから東の異教の地をキリスト教化するためにバルト海沿岸に到来し、古プロイセン人を滅ぼし、リヴォニアを征服し、その矛先は更に東に、現在のロシアにおいて英雄視されるアレクサンドル公(後にネフスキーと呼ばれる)が統治していたノヴゴロド公国に向けられた。直前の時期にスウェーデンからも侵略されていたアレクサンドル公は、1240年にチュド湖上の戦いで騎士団を打ち破り、十字軍の侵略を食い止めた。後述するように、この時期のルーシはアジアから到来したモンゴル(ルーシではタタールと呼ばれた)の支配に服すかどうかという時期にあたり、モンゴルに恐れをなしたローマ教皇からは対

モンゴルで団結することを提案されたのだが、カトリックから侵略を受けたばかりのアレクサンドル公はこの話に乗らなかった。以後、彼の子孫が統治する北東ルーシやモスクワ公国は対外的に、徐々に反カトリックの立場を取りがちな存在となった。もちろん常に、そしてあらゆる点でカトリックを敵視したわけではない。ただ、ごく端的に言えば、不和の種が蒔かれたとは言えよう。

3. モンゴルの支配とロシア

1240年代からモンゴル人の支配下に入ったルーシを、モンゴルはどのように支配したのか。これは難しい問題である。モンゴルは直接ルーシの状況についての記録をほぼ残さなかった。他方でルーシ側は、主に教会聖職者が記録を残したが、具体的な支配が体系的に叙述されているわけではない。ただ、わかっているのは次のことである。モンゴルはルーシを直接支配することはなかった。すなわち貢税などを上納させる形で基本的にはリュリック朝の諸公の所領を安堵し、従来の地位と支配を認めた。またモンゴルはルーシ人の信仰にも口を出さなかった。そのせいか、教会は積極的にモンゴルのルーシ支配を正当化した。いわく、ルーシ人は罪深く、モンゴルの支配は神からの罰であると。

僅少な史料状況の下、ロシアの幾つの特徴がまさにこの時代に生じたと考える歴史家も現れた。第一にロシアの「後進性」である。モンゴルの支配は、西欧と同じ歴史的発展の過程にあったルーシを破壊し、結果としてロシアは後進国になった、とする意見である。またモンゴルの専制支配のあり方がロシアに持ち込まれたとする意見もある。他方で、モンゴル支配をロシアにとってプラスと捉える歴史家もいる。12世紀から分裂の傾向にあったルーシの諸公国は、モンゴル支配の結果、モスクワ公国のもとで統合された、とする意見である。但しこの意見は、まさに後のロシアからの視角のもとで言いうる意見である。例えばウクライナの、特に中・西部の人々にこれは受け入れられないだろう。また考古学の研究などの力を借りながら、今では被害の程度が「全域」に広がっていたわけではないこと、バトゥの時代の後、上述のアレクサンドルやその子、孫の時代に、彼らが敵対する諸公の弱体化を目論んで、モ

ンゴルから軍を引き出してこれを攻めたことなどが明らかになっている。そうすると、ルーシが一方的に被害者であったとする見方も受け入れがたい。

約240年のモンゴルのルーシ支配の中で、目に見える影響として以下の点について述べておきたい。第一に政治制度への大きな影響は見受けられず、保証制度など部分的にはモンゴルの影響は残った。また言語の面では多くの用語がロシア社会に入り込んだ。しかし、マルクスのような東洋の専制制度が直接ロシアに持ち込まれたといった説は総じて疑問視されていると言ってよい。15世紀半ばまでは、後のロシアの核となるモスクワ公国においてさえ、専制体制のようなものは存在しなかった。モスクワ公は多くの有力な臣下に囲まれ、彼らの助けなしで統治することはできなかった。公はまだ、同輩中の第一人者の如き存在だった。また強大な貴族諸家門が存在していた。教会も15世紀によくコンスタンティノープルから離れ、モスクワ公に寄り添うようになった。寵を失った臣下を盲目にしたり、殺害したりするという政治手法も、モンゴルの支配以前から存在した。

第二に、モンゴルの支配はロシアの形成と独立を準備した。この支配なくして、モスクワの強大化はなかった。モンゴルに取り入ることで、モスクワ公はルーシの北東部の中心になり、さらにはその立場を利用して北東ルーシ諸公国の集団防衛体制を作り上げていく。

4. ロシアの形成

北東ルーシの中心となったモスクワ公国が、ロシアに転じていく過程は15世紀に入ると急速に進行した。この過程でまず重要なのが、ロシア正教会の成立である。1438年に始まったフェラーラ・フィレンツェ公会議において、ローマ教皇は、オスマン朝の攻撃を受けて身動きの取れないビザンツ帝国の弱みに付け込み、正教会に対し、彼の首位権を認めるよう迫った（大局的には東西教会の合同と言える）。会議に参加したモスクワ府主教イシドールはモスクワ公ヴァシーリー2世の指示に反して教会合同に賛成し、会議からの帰国後、モスクワで投獄された。こうした状況において、教会は、後継府主教をコンスタンティノープルに求めるも、新府主教は待てども到来しなかった。

そこで1448年、モスクワでは主教たちが集まり、リャザン府主教ヨナを府主教に選んだ。その5年後、ビザンツは滅亡する。続く段階は、リトアニア大公国管区の独立である。かつてのキエフ・ルーシの領土の相当部分を当時支配領域としていたリトアニアは、当然多くの正教徒臣民を抱えていたが、彼らは教会管轄上ではモスクワの府主教のもとにあった。この状況は曲がりなりに維持されてきたのだが、1458年にはローマ教皇の秋波を受け、リトアニア大公カジミエラス（ポーランド王としてはカジミェシ4世）はモスクワの管区から離脱に同意する。こうして、かつてビザンツ、リトアニア大公、モスクワ公の力関係の上に存在していたこの地の正教会は、今やモスクワ公の権力のみ依存することを余儀なくされ、「国家教会化」していくことになる。次第に府主教の中にはモスクワ公の「イエスマン」が増えてくる。

続いてモンゴルからの独立が生じる。15世紀半ばまではモスクワ公も正教会も、サライのモンゴルの権力を至高のものに見なし、これに手向かうことはなかったのだが、モンゴルの分裂やモスクワ軍そのものの整序化・強化が生じ、加えて正教会もモンゴルを悪であると喧伝しはじめる。1470年代、モスクワ大公イヴァン3世はついにモンゴルへの貢納支払いの停止をする。そして、これに対するモンゴルのアフマト・カンの懲罰軍を斥けることで、1480年、モスクワ公国は事実上独立を果たすことになる。

イヴァン3世の治世は、大改革が進んだ時代であった。彼は領土を拡大し、統一の裁判法典を導入し、中央では官房制度を構築した。獲得した領土を分与して多くの軍勤務者を確保した。ここには、古くから分割相続制度の中で零落した古い貴族家門の構成員も入り込むことになる。こうして多くの土地と教会とを束ねるモスクワ大公に権力が集中していくことになる。そしてまさにこの時期、ルーシは、まずは教会で、次いで世俗世界においても、ビザンツ由来の呼称であるロシアと呼ばれ出すのである。

こうして形成された大公権力は、16世紀に入ると更に強化されていく。ビザンツ皇帝の血筋にあたる、イヴァン3世の後妻ソフィヤは、結果的に先妻の血筋を絶やし、息子ヴァシーリー3世を

大公に就けることに成功するのだが、まさにこれを後押ししたのが正教会のイデオログのヨシフ・ヴォロツキーであり、教会は、神に由来する君主のもとでこれを支えるべき存在であるとして、専制権力を支える柱への転進の道を大きく踏み出したのである。彼の弟子筋はその後の正教会で有力な地位を占め、次のイヴァン4世（雷帝）を育てていく。カトリックに対する基本的な嫌悪も擦り込まれていく。他方で雷帝は有力・零細を問わず貴族層の「失寵」（処刑）や所領の没収・荒廃化を押し進め、君主権力を一段と強化した。

その後

リューリクの血筋は16世紀末に途絶え、一旦は選挙王制のような状況が訪れ、権力構造は大きく変わりかけた。しかし結局は1613年に君主に選出されたミハイル・ロマノフが徐々に権力を自らに集中させ、彼の子孫もこれを引き継いでいく。同時にロマノフ家のロシアは、正教会を下支えとし、反カトリック的（常にではないものの）気質を有するロシアの政治権力の特徴を引き継いでいったと言えるだろう。

とは言え、ロシア革命に至るまでの間、上記の伝統的権力構造が揺らいだ時期があったことも認識すべきである。17世紀末に即位したピョートル1世は、少年時代から外国人（西欧人）村に出入りしており、西欧に対する嫌悪感は薄かったようである。共治者の死後、彼は伝統に縛られない形で単独統治を始める。偽名を使ってヨーロッパ使節団に加わり、オランダ、イングランド、プロイセンなどを歴訪し、造船技術を中心とした西欧技術を技師たちと共にロシアに持ち帰った。正教会に対しては教会の頂点である総主教座を廃止し、代わって君主が制御する宗務院を設置し、教会を国家管理の下に置いた。

その後の君主たちも、正教色を有しながらも実際には西側から多くのものや人材を受け入れた。18世紀のエカチェリーナ2世は啓蒙思想をはじめとする西欧文化をロシアに持ち込み、アレクサンドル1世も西欧に魅了された。しかしそれはピョートルの場合と比べて一時的・部分的であり、権力の集中体制（専制）と正教は、1917年まで、ナショナル・アイデンティティとしっかり結びついていくのである。